

水滴の主題による変奏曲

武田陽介新作展によせて

武田陽介（1982 - ）は、2009年にデビューしてから、タカ・イシイギャラリーを中心に内外で活躍して注目を集め、2014年には作品集『Stay Gold』を出版した。しかし2019年の個展を境にその活動は途絶え、風の噂では故郷で闘病中ということであった。

去年の秋であったか、思いもかけず武田さんからメールを貰い、新作を見せていただいた。4年ぶりに再会した写真家は、4年前と殆ど変わっていなかったのに拍子抜けしたが、そこには「Digital Flare」のシリーズの発展形と思われる、抽象写真がならんでいた。美しい光の軌跡の写真はこの作家の独特な感性が健在であることを証していた。

参照点として作品集『Stay Gold』から「Digital Flare」の原点となった逆光の写真を見よう。この写真を見ていると、まるで光源が写真のなかにあり、周囲の葉はその光を受けているように見える。つまり、カメラ＝四角いフレームの中に光が導き入れられ、画面内がその光に浸っているように見えるのだ。カメラ＝暗室＝フレームの中に光を入れ、空間に音を響かせるように、光を反響させ増幅する — 武田写真のほぼ全ては、この感性に貫かれている。武田の関心は光にあり、カラーは、フレームの中で培養された光からにじみ出るプリズムカラーであって、決して絵画的色彩ではない。

「Stay Gold」のGold（黄金）とは幼年時代、つまり初心と基本の比喩である。箱の中に光を入れることは写真の基本と言えるから、武田写真は、写真の基本の写真なのである。高解像度で撮影された写真の細部には、光のテクスチャが泡立ち、作者は光の泡に満ちたカメラ＝部屋のなかに自閉する。

しかし他方で、そのような写真的自閉に対して、武田ははっきりと距離を取っている。ジェームズ・ウェリングやヴォルフガング・ティルマンズの抽象写真がレンズを使わない写真であるのとは対照的に、武田陽介の作品は、どれも作者がひたすら地道に足で稼いだストレート写真である。場所と時間、最適な光の条件を探したうえで撮影される作品は、地理条件や天候など現実世界の条件に依存し、根気の要る身体労働の果実であり、そこから厳選された写真なのである。

次に、武田作品の抽象は、なるほど没入的なイメージであるが、プリントとして実現されるときにはそれが写真であること、そして物理的な紙物体であることを隠さない。「Digital Flare」は、強い逆光に向けられたレンズがハレーションを起こして、レンズ自体の存在を画像上に刻印する写真であるから、写真というメディアが透明性を失って、間に挟まった（＝メディア）機構として露頭する写真として理解できる。また、プリントされた作品の余白と輝く光のイメージは同じ、すなわち光の泡立ちとて、実はたんなる紙という物質にほかならない。

*

箱の中の光に対する自閉的感性と、それを突き放す実作者としての実践という、武田写真の両輪は、新作でも健在である。今回のモチーフは箱の中の光ではなく、表面に結露した水滴である。それが部屋の中で、複数の人工光、露光時間、ブレさせる方法（カメラの動かしかた）、レンズの種類、カメラの機種、等々、様々な条件下で撮影されている。カメラという箱から出た作者は、モチーフを1つに切り詰め、室内に引きこもって、撮影条件を延々と変化させながら撮影を繰り返し、その結果の数千数万のイメージから厳選して、新作群を提示している。

リスト、ブラームス、ラフマニノフ…… 少なからぬ作曲家が「パガニーニの主題」をもとに素晴らしい変奏曲を展開しているが、それに倣って言えば、これは「水滴」の主題（作品「011801」のイメージ）による変奏曲なのである。パガニーニの主題がよく知られたメロディであるように、小さなレンズにも見立てられる水滴のモチーフも、決して珍しくはない。さらに、カメラを用いた撮影の条件もまた、ピアノの鍵盤のように万人に開かれている。それでも、本展を構成する豊かな変奏の数々は、観る人を引き付けてやまないだろう。

病と折りをつけ、心機一転、KOSAKU KANECHIKAで再始動した作家の新作群に注目されたい。

2024年7月

清水 穰